

## 第6章

## 可能性感覚の誕生

## 01—ムージルにおけるオーストリア的なるもの

世紀末ないし世紀転換期のヴィーンについて語られるとき、ホーフマンスタールやシュニッツラー、クリムトやシーレ、あるいはまたシェーンベルク、ヴェイトゲンシュタイン、フロイトらと並んで、ムージルの名が挙がることが多い。ひとつには、滅びゆくオーストリアⅡハンガリー二重帝国を「カカーニエン」(Kakaniien)と呼んだ、命名者の特権によるものだろう。この名称は世紀転換期ヴィーンをあつかう書物のほとんどに引用されているし、また、彼の未完の小説『特性のない男』は「世紀末、ウィーンの雰囲気、他のいかなる歴史的な著述や文学的な作品よりも見事にとらえている」<sup>1)</sup>ともいわれる。だが、ムージルは、たとえばホーフマンスタールやシュニッツラーら「若いヴィーン」の詩人たちがそうであったのと同じ意味あいでは、オーストリアの作家だったのだろうか。ヘルマン・ブロッホは、『ホーフマンスタールとその時代』(一九四七—四八)において「ヨーロッパの価値真空の中心ヴィーン」<sup>2)</sup>の申し

子としてホーフマンスタールをえがいたが、はたして同じテーマで『ムージルとその時代』を書けただろうか。

ホーフマンスタール（一八七四—一九二九）に限らず、「若いヴィーン」の中核をなす作家・詩人たちの多くは、シュニッツラー（一八六二—一九三二）、ペーア・ホーフマン（一八六六—一九四五）から、アンドリアン・ヴェーアブルク（一八七五—一九五二）、さらにはあのアルテンベルク（一八五九—一九一九）にいたるまで、一八六〇年代以降オーストリアの自由主義をささえた裕福な市民階級の息子たちであり<sup>①</sup>、ヴィーンに生い育ったヴィーンの文化エリートであった。オーストリア文化の中核に位置していたために、かれらヴィーンの影響主義者は、その耽美主義的かつ非政治的姿勢にもかかわらず、キリスト教社会党・オーストリア社会民主党に代表される大衆政党の台頭によって一八九〇年代には決定的となった自由主義の崩壊という、政治の荒波に身をさらさねばならなかった。あるいは、C・E・シヨースキーにならって、こう言ったほうがいいだろうか。皇帝フランツ・ヨーゼフ（一八三〇—一九一六）による過去四度の裁可拒否のち、札つきの反ユダヤ主義者カール・ルーエガー（一八四四—一九一〇）がついにヴィーン市長に就任した一八九七年の事件に象徴されるように、ヴィーンの世紀末とは、じつは「文化に敵対する」大衆が勝利を収めてしまった」時代であった。その騒然とした状況下、あまりにも繊細なヴィーン自由主義文化の息子たちは、「まずまずおぞましくなる政治的現実という不快な世界からの避難所」を、その耽美主義的な芸術のなかに求めたのだ<sup>②</sup>、と。

いつぼうムージルは、技師の息子だった。父アルフレート・ムージル（一八四六—一九二四）は後年ブリュン工科大学の正教授に迎えられる、晩年には世襲貴族の称号まであたえられた人物だったが、若いころは機械工場の工場長として、あるいは専門学校校長として、帝国内の地方都市を転々とわたり歩いた。息子ロー

ベルトもまた、父の転勤につきしたが、その幼少期をヴィーンから遠くはなれた町で過ごした。世紀末ヴィーンを体験したのは一八九七年から九八年にかけての数か月にすぎず、一九〇三年にはシュトゥンプのもとで哲学と心理学を学ぶためにベルリンに行ってしまう。一九〇八年に哲学博士の学位を取得したあとベルリンにとどまり、ヴィーンに居を定めるのはヴィーン工科大学の図書館に職を得た一九一〇年末のことである。以後も、一九一四年にベルリンの『ノイエ・ルントシャウ』誌の編集者となるなど、頻繁にベルリンにおもむき、一九三一年にはふたたびベルリンに居を移す。このように一九〇三年以降、巨視的に見ればヴィーンとベルリンを往復すると考えてもさしつかえないほどベルリンとの関係は深いが、その理由のひとつは、彼の出版社であるローヴォルト書店がヴァイマル期の当時——現在のハンブルク近郊ラインベークではなく——ベルリンにあったからだろう。原稿が書けず経済的にたえず困窮状態にあったムージルを支援するために、一九三二年にムージル協会が設立されたのも、そのときの彼の居住地ベルリンにおいてであった。

「若いヴィーン」の詩人たちとは、受けた教育も異なる。かれらのほとんどが伝統あるヴィーンの人文系ギムナージウムで豊かな古典語教育を享受した——しかも、アルテンベルク、シュニッツラー、ペーア・ホーフマン、ホーフマンスタールの四人は、いずれも名門「アカデミー・ギムナージウム」の同窓——のたいし、ムージルは、シュタイアの実科ギムナージウムを皮切りに、ブリュンの実科高等学校 (Oberschule) 、アイゼンシュタットの陸軍実科初等学校 (Militär-Unterrichtsschule) 、メーリッツシュ・ヴァイスキルヒェンの陸軍実科高等学校 (Militär-Oberschule) と、いつかんして実科学校のコースを歩んだ。大学もまた、ヴィーンの陸軍工科大学を経てブリュン工科大学に進み、そこで機械工学を学んでいる。このような学歴しかなかったため、その後いったんシュトゥットガルト工科大学の無給助手になったのちに、もう一度ベ

ルリーン大学で哲学と心理学を学びなおそうと決心したとき、彼はおくればせにブリュンのギムナージウムで大学入学資格試験を受けなければならなかった。これについては、わたしは以前、おなじ「大学」といっても、彼がすでに学んでいた工科大学 (technische Hochschule) は、当時のドイツ語圏において、人文系ギムナージウムと直結したエリート養成機関である大学 (Universität) と同等のものとは見なされていなかったからだろうと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。早坂七緒によれば、当時ベルリン大学では、哲学部だけはギムナージウム卒業証書がなくても正規の学生として学籍登録ができたとのことで、ムージルがおくればせにギムナージウム卒業資格を取ったのも、将来の博士号取得、さらには大学教授資格取得にそなえてのことだったようだ<sup>5)</sup>。

いずれにせよ、こうしたことからわかるように、ヴィーンを強固な中心とするオーストリア文化を想定した場合、ムージルは、その育った場所、受けた教育、その後の経歴のどの点をとつても常に周縁の人にとどまったのであり、世紀転換期オーストリアというその時代もまた、ムージルと「若いヴィーン」の詩人たちとは異なったものとならざるをえないと思われるのである。

『ムージルとその時代』を書かなかったヘルマン・プロツホは、一通の手紙を残した。「ローベルト・ムージルはオーストリアの作家か」というM・フリンカーの問いにたいして、一九三六年に書かれたその手紙のなかで、彼は然りと否という二重の答えを提出している。プロツホによれば、ムージルは「オーストリアの作家」である。なぜなら「テーマ的にも、登場人物を選ぶさいにもあらわれている、オーストリア起源のものとの緊密な結びつき」が認められるからである。しかしながら、同時に、ムージルは「オーストリアの作家」ではない。なぜなら彼の「精神性のあり方、そのときすまされた鋭さがむしろ西欧に根をおろしている、いや、ほとんどフランス的精神と言っているだろう」からである<sup>6)</sup>。と。はたして、そうだろうか。

ここで「テーマ」と「登場人物」におけるオーストリア性の問題に的をしばれば、『特性のない男』を見るかぎり、たしかにその作中人物は第一次世界大戦前夜のヴィーンに生きていると言える。第一巻の枠組みをなす「平行運動」は、フランツ・ヨーゼフ一世の治世七十周年記念式典を準備するオーストリア愛国運動であるし、二重帝国の指標である多民族問題は、折にふれ揶揄的に話題にのぼる。あるいはまた、ディオティーマ、ポーナデアといった女たちは、そのふくよかな装飾美が同時におびる娼婦性によって、あたかもクリムトの絵のごとく、世紀末ヴィーンの雰囲気を濃密に伝えてくれもする。しかし、作品世界にえがきだされた世紀転換期ヴィーンに固有の現象に目を奪われて、『特性のない男』第一巻の骨格をなす「テーマ」を忘れてはならないだろう。

伝統的近代小説の叙事性を欠くといわれるこの小説は、しかしそのいつぼうで、「二十世紀初頭の精神史のパノラマ」<sup>[7]</sup>をくりひろげるのであって、主人公ウルリヒを中心とする登場人物群の配置をもとに、第一巻の精神史の見取り図を描いてみるならば、そこにひとつの構図がくつきりと浮かびあがってくるだろう。「平行運動」に現代文明からの解放をもとめるディオティーマ、「魂と経済の結合」を説き、あらゆる分野の専門家にたいし「全体人」(ein Ganzer)としてふるまうプロイセンの大企業家アルンハイム、「小市民的世界の破壊」を唱え、資本主義的思考様式に染まらぬ共同体を志向する民族派青年運動の指導者ハンス・ゼップ、ニーチェに心酔し、狂気の行動に駆りたてられるクラリツセ等、「平行運動」の内外で反物質文明・反理性・反進歩を標榜する一群の非合理主義者にたいし、ウルリヒが挑発と嘲笑を駆使してそのロマン主義的幻想を撃つ、その虚妄性をあばく、という構図である。この構図のもとに展開される同時代の非合理主義批判が第一巻の「テーマ」をなすのであるが、はたしてそれは特殊オーストリア的なテーマであろうか。

周知のごとく、世紀転換期、「実証主義への反逆」<sup>[8]</sup>を公分母としてすでに台頭していた非合理主義の

潮流は、一九一〇年代以降、神秘的体験や秘教的宗教の流行となつてドイツ語文化圏——とりわけドイツとスイス——の精神文化全般にわたる地殻変動をひきおこしていた。一九一三年結成の「自由ドイツ青年」が「反資本主義、反技術文明、進歩への懐疑」に連動する思想的背景をもつていたことに象徴されるように、時代は「乾涸びた合理主義」を否定し、「行動」「魂」「体験」というスローガンを声高にとなえはじめたのである<sup>9)</sup>。『特性のない男』に登場する前述の人物群は、このような時代の思想潮流のなかに位置づけられよう。くわえて、かれら非合理主義者の言説が、ヴァルター・ラーテナウ（一八六七—一九三三）、オスヴァルト・シュペングラ―（一八八〇—一九三六）、ルートヴィヒ・クラ―ゲス（一八七二—一九五〇）ら、そのほとんどが同時代のド、イ、ツのイデオログの著作からなる引用の織物であることも明らかにされるとき<sup>10)</sup>、『特性のない男』第一巻は、世紀転換期ヴィーンを舞台としつつも、その時代の特殊オーストリア的思想状況を照射する作品であると言いがたく、また、そうした非合理主義的言説には生まれた「粗野な形而上学的欲求」にたいするムージルの苛烈なイデオロギー批判の姿勢も、耽美主義的・非政治的なヴィーン印象主義の土壌とは一線を画すものであると言いうるのである。

『特性のない男』第二巻のウルリヒはしかし、「忘れられていた妹」アガ―テとの出会いの後、一転して神祕主義的となる。小説自体も「千年王国のなかへ」（*Ins Tausendjahre Reich*）という副題を掲げることによつて、ナチスの「第三帝国」（*Das Dritte Reich*）に呼応する、「きわめて革命的」（*U*）とE・E・E・キツシュ（一八八五—一九四八）に言われるような性格をおびるにいたるのだが、それには第二巻のテーマとなる「別の状態」の問題が重層的に関わつてくるように思われる。以下しばらく、「別の状態」が構想された地平に立ちかえつて、その出生にひそむ両価的構造に照明をあててみたい。

「別の状態」についてムージルがはじめて公的に語つたのは、一九二五年のエッセイ「新しい美学の萌芽」

においてのことである。このエッセイは、もともとバラージ・ベーラ（二八八四—一九四九）の映画理論書『可視的人間』（一九二四）『邦訳は『視覚的人間』』の書評として書かれたものであるが、その内実はむしろ、バラージの述べる映画の特質を手がかりにしてあるべき芸術の機能を論じた、ムーシル自身の、いわば美の綱領とでも呼びうるものになっている。バラージによれば、映画（＝無声映画）のなかでは、言葉をもつ人間ともの言わぬ事物の格差が解消し、人間と同質になった事物はそれによって「生氣と意味を獲得する」<sup>12</sup>。その結果、映画のなかのすべての事物は、日常の意味連関を離れ、それ自体の固有の意味をこえた象徴的意味をおびるようになるのだが、「その場合、〈象徴的相貌〉とは、ゆるぎない堅牢さの衣に身を固めたわれわれの世界像のなかの、いわば柔らかな部位にあたるだろう」<sup>13</sup>とムーシルは言う。それは、ノヴァーリスらがみずからの不可思議な体験に見いだした「あの意識の変化」を想起させるものであり、「映画の神秘主義」と呼んでいいものである<sup>14</sup>、と。ムーシルは、バラージが映画についての実践的考察を通して「ふたつの世界のあの境界」（diese Grenze zweier Welten）に到達したことに、驚嘆するのである。

それも当然かもしれない。へふたつの世界の境界」という問題は、『生徒テルレスの惑い』（一九〇六）以来、いっかんしてムーシルの主要な関心事であった。ただ、一見ゆるぎなく堅牢に見える日常的世界と、その後にかいま見た非日常的世界とのあいだで、惑うしかなかった少年テルレスとはちがひ、『生徒テルレスの惑い』の発表後ほぼ二十年を経た四十代半ばのムーシルは、へふたつの世界」に歴史的考察をくわえ、それぞれに名前をあたえることができた。「この不確かな境界線の行方が——理性を装ったものであれ、狂信的なものであれ——なんらかの偏見なしに追求され、あきらかにされたことは、残念ながらいまだかつてなかった。だが全人類史をつらぬいて、ふたつの精神状態へと二分する一本の線が引かれているように思われる」<sup>15</sup>。その「ふたつの精神状態」がすなわち、「通常の状態」（Normalzustand）と「別の状態」（anderer

Zustand) とある。

「通常の状態」とは、「能動性・勇敢・狡猾・不実・せわしなさ・邪悪・狩猟家気質・好戦性」といった道徳的特性をもつ精神的態度であり、世界や他者、あるいは自分自身にたいする関係の場での「われわれの精神の苛烈さ」をいかになく發揮することによって、もともととるにたらぬ存在であった人間は、地上の支配者となるまでに發展をとげた。「測定し、計算し、追跡する、実証的・因果的・機械的思考」という近代合理主義の精神もまた、その一形態である。対するに、「別の状態」とは、「愛の状態」あるいは「善の、世界離脱の、瞑想の、観照の、神への接近の、恍惚の、意志喪失の、内省の状態」等の名で、あらゆる歴史上の民族の宗教や神秘主義、倫理のなかにくりかえし立ちあらわれてきた根本体験である。だがそれは、「奇妙にも發展しないままだった」。「この世界の像のなかでは、尺度も精密さもなければ、目的も原因もなく、善悪はあつさりと抜け落ちていく」「そして、あらゆるこうした諸関係に代わって、われわれの存在と事物や他者の存在とのあいだに、満ちては行く、ある神秘的な溶けあいが生じるのである」<sup>16)</sup>。

こう語ったムージルは、バラージのいう映画体験をこの「別の状態」の圏内に位置づけ、そこで起こったのは、たんなる視覚的体験ではなく、「通常の体験全体の破砕」であり、「これこそがあらゆる芸術の根本能力である」「立」と断言することによって、みずからの美の綱領の呈示に向かうのである。すなわち、芸術には「その体験を通して経験の公式を破砕し、それによって世界の像、および世界における態度をたえず改変し、更新するという使命がある」<sup>18)</sup>と。こうして「別の状態」は、ザミャーチンの「反エントロピー」にも似た、美のユートピアの刻印を受けるのだが、そこにはひとつ見すごすことのできない問題がふくまれている。ムージルのいう芸術の使命とは、ふつう「異化」と呼ばれる芸術の機能であり、芸術体験と経験の公式とのあいだには、前者による後者のたえざる破砕にうながされた弁証法的運動が成り立つ、言い換えれば、

芸術体験を通して人は常に公式からはずれた新たな経験を獲得するものと了解したのであるが、ムージルはいっばうで、そのような「経験」(Erfahrung)を産出する運動から切りはなされた絶対的「体験」(Erfahrung)の存在を、「別の状態」のなかに認めるのである。それは「けっして完全にはくりかえすことのできない、固定化できない、個人的な、いやそれどころかアナキーな体験」<sup>19</sup>であり、「他者とのあらゆる連関を喪失した純粋な状態性(Gemeine Zustandlichkeit)」<sup>20</sup>としての美的体験である。そうした「一回性、瞬間性」の体験はわたしたちを「経験」へは導かず、経験とは別の次元に連れさってしまふ、とムージルは言う。そのとき人は「その体験を自己の内部に受け入れるのではなく、みずから体験のなかに吸収される」といった「体験にたいする別の関係」に立っており<sup>21</sup>、そのとき「世界は、事物の関係連関としてではなく、唯我の体験の連続として体験される」<sup>22</sup>のだと。体験と公式の弁証法を拒絶する秘教的な美の世界——これが「さしあたりすべてが停止するへ別の状態」の暗い領域<sup>23</sup>の持つ、もうひとつの顔である。

こうして「別の状態」が、芸術の使命という啓蒙的外皮を脱ぎ捨て、至高の美のユートピアとしてその隠された姿をあらわすにいたり、わたしたちはここに、このきわめて神秘主義的色合いの濃い論説に影をおとしている人物の名を呼びだすことができる。ルートヴィヒ・クラージェスである。「新しい美学の萌芽」が書かれる前年、ムージルがクラージェスの『宇宙創造的エロス』(一九三二)を読んでかなり詳細な抜萃を作成したこと、その抜萃の冒頭に「Anderer Zustand」と書きしるしたことはよく知られているが、「別の状態」という言葉自体はそれ以前の日記にすでに使われていることもあつてか、「別の状態」の構想にさいしてクラージェスのあたえた影響については、これまで詳細な考察はおこなわれてこなかった。しかし、『宇宙創造的エロス』に見られるエロス論・形象論を読めば、「新しい美学の萌芽」と『宇宙創造的エロス』は、そのエッセンスにおいて共鳴しはじめるのである。クラージェスの秘教的言語の呪縛から逃れて『宇宙創造的エロス』

の基本的主題を抽出するなら、それは次のように要約できるだろう。

「エロス」は「性」(Sexus)とは異なる。性が性衝動の充足をもとめることによってたえざる欠乏の苦しみに陥るのにたいし、エロスは「歓びの状態」であり、それ自体「溢れでる充溢の状態」であるがゆえに、とくに「宇宙創造的エロス」とも呼ばれる<sup>24</sup>。このエロスの「クリスタルのように透明な恍惚」<sup>25</sup>のなかで「魂」(Seele)は「精神」(Geist)から解放され<sup>26</sup>、この「魂のめざめ」によって「観照」(Schauung)が可能となる<sup>27</sup>。「事物」(Ding)を見るのが知覚行為だとすれば、「観照」とは「形象」(Bild)をとらえる行為である<sup>28</sup>。ここでいう「事物」は、物理的世界観にもとづく通常の物と解しうるとして、「形象」については、『意識の本質について』(一九二二)における説明をも参照すれば、時間と空間をつらぬいて万物に生命をあたえつつ変転しゆく、みずから魂を有する「呪術的な力」のごときものと考えられる<sup>29</sup>。そして、「エクスタシーのなかで個人存在の形式を破壊する者には、その瞬間、事実の世界」(Die Welt der Tatsachen)は没落し、すべてを駆逐する真実在の力とともに、形象の世界 (die Welt der Bilder) が復活する<sup>30</sup>といわれるのである。

クララゲスの論述はなおもさらなる奥義のなかへとわけ入っていくが、彼のいう「宇宙創造的エロス」および「形象の世界」とムージルの「別の状態」との構造的同質性はすでにあきらかであろう。「エロス」がくりかえし「状態」だと言われている点、「観照」、「恍惚」などの言葉の類似等に比べて、エロスの陶酔のなかで存在の形式が破壊され、そのとき「事実の世界」は没落し「形象の世界」が立ちあらわれるという考えは、そのまま、美的陶酔のなかで経験の公式が破壊され、そのとき「通常の状態」は没落し「別の状態」が立ちあらわれるというムージルの記述と呼応し、さらに「世界の運命はその照らされた一瞬に現前する」<sup>31</sup>、「形象の世界はそれを体験する者の観照するエロスのうちにのみ輝きでる」<sup>32</sup>という

クララゲスの言葉は、「新しい美学の萌芽」における美的「体験」の「一回性、瞬間性」の強調と共振するものである。

にもかかわらず、ムージルはクララゲスの思考の痕跡を隠蔽しようとする。「新しい美学の萌芽」のなかには、同時代に蔓延する「悟性に抗して魂を救出する試み」<sup>33</sup>を誤った教説として斥ける一節があるが、悟性を精神と言い換えたなら、当時、精神からの魂の解放をもつとも峻烈に叫んだ者こそ、ほかならぬクララゲスであった。クララゲスと共振しつつ、悟性の皆を守ろうとするこのムージルの姿勢のなかに、わたしたちは、「別の状態」が構想の時点ですでに懐胎していた両価性を認めることができるだろう。

「別の状態」の問題は、その後『特性のない男』第二巻の中心テーマとして、構想時のユートピア性をたもったまま、そのレヴェルを美の理論から生の規範へと移して検証される。多くのムージル研究者が指摘するように、そこにおいてもこのテーマに坎するクララゲスからの影響は強く、「クララゲスおよび彼の『宇宙創造的エロス』との出会いなくして、この小説は考えられないだろう」<sup>34</sup>というクララゲス研究の側からの発言も、あながち誇張とはいえない。しかし、生の規範としての「別の状態」は、すでに何度も見たように、生前発表されなかった遺稿部（清書稿）の最後の二章（第五一／五二章）にいたって、自然の生から離脱した死の世界に通じるとして、最終的には否定されるのである。ムージルにとつて、それは同時に、かつてクララゲスとともにいただいたユートピア幻想を、みずから手で解剖し、破壊することを意味するだろう。クララゲスの戯画として第二巻に登場するメインガストに向けられた辛辣なまなざしは、そのことを裏書きしているように思える。

だがなぜ、このユートピア幻想の破壊は可能だったのか。こう問うとき、遺稿部の覚書のなかで「別の状態」に代わるものとして予定されていた「帰納的志向のユートピア」(die Utopie der induktiven Gestaltung)の構想

は、「帰納的」という言葉を介してひとつの示唆をあたえてくれはしないだろうか。「別の状態」のユートピアが破綻したあとの構想を考えるムージルの遺稿部の覚書には、「帰納主義の必然性」「帰納的敬虔さ」「帰納的な神」等、「帰納的」をキーワードとするメモが数多く残されており、ある研究者はその事実をもとに以後ウルリヒは「ただもう帰納的に、一步一步、生の問題を考えていく」<sup>35</sup>のだと述べているが、この「帰納的」という言葉はまた、そうした一般的な意味をこえて、ある連想へと誘ってくれもする。つまり、世紀転換期の一八九五年、ヴィーン大学に新設されたばかりの「帰納科学の歴史と理論」(Geschichte und Theorie der induktiven Wissenschaften) 講座に招聘されたエルンスト・マツハ(一八三八—一九一六)の存在を思いおこさせてくれるのである。実証主義的風潮を背景としてイギリス経験論哲学復興の気運が顕著だった当時、経験的な事実の背後にいつさの超越的存在を認めず、いかなる種類の形而上学も拒否したマツハは、ヴィーンにあつて実証主義の強力な磁場を形成していた。その影響は多岐にわたり、印象主義の哲学的基礎づけをマツハにもとめた「若いヴィーン」の詩人たちから、法実証主義を打ちたてたハンス・ケルゼン(一八八一—一九七三)、さらにはオーストリア・マルクス主義者にまでおよんでいるが、一九〇八年に『マツハ学説判定への寄与』で哲学博士の学位を取ったムージルも、そのなかのひとりに数えられる。

『マツハ学説判定への寄与』の一節で、ムージルはやはり、マツハの認識観に「一般的な帰納法理論」<sup>36</sup>と一致する点があると述べているが、それはともかく、これは奇妙な論文である。この学位論文については本章第五節で詳述するので、ここでは簡単な紹介にとどめるが、その意図するところは、「厳密な自然科学の確実な基盤」<sup>37</sup>にのみ立脚するとみずから主張するマツハの学説が、はたして論理的整合性を有しているかどうかの検証にある。マツハの認識観を中心に、その物理概念、函数概念、自然必然性の否定、要素一元論を検討する『マツハ学説判定への寄与』は、厳密な内在的批判に徹してマツハの自己矛盾を抽出してい

くにもかかわらず、その批判は論理的矛盾にかぎられ、マツハ哲学そのものの否定にはなっていない。論文の末尾で、ムージルはみずから次のように述べている。「一般に認められているように、マツハの諸論文はその個々の点においては、輝くばかりの叙述とあふれんばかりの刺激に充ちているのである」〔38〕、と。ムージルのマツハ批判が、反マツハの立場をとる指導教官カール・シュトゥンプ（一八四八—一九三六）との関係上、不本意ながらおこなわれたといわれるゆえんであるが、じじつ、この論文の冒頭、「世界像が自然発生的に哲学者の頭から生まれでた時代は終わった」〔39〕と宣言するムージルの、反形而上学の姿勢は見紛うべくもないのである。

ムージルの『マツハ学説判定への寄与』は、H・アルンツェンも言うように〔40〕、この反ドグマ主義者のなかになおも潜むドグマ的なものをいつそう徹底して剔抉しようとした試みと見なしうるのであり、この反ドグマ主義的あり方を最良の意味での実証主義の精神と呼ぶことができるなら、わたしたちは、この実証主義の精神にもとづいて幻想破壊的知の営みを遂行した幾多の人びとを、世紀転換期のヴィーンに見いだすことができるのである。すなわち、フロイト（一八五六一—一九三九）、ケルゼン、ヴァイトゲンシュタイン（一八八九—一九五二）等々を。長尾龍一は、二十世紀前半の反ドグマ的知識人のあいだから「徹底的に反イデオロギー的で、偶像破壊的であろうとする諸体系が生み出された」と述べ、具体例として論理実証主義・精神分析・ケルゼンの法理論をあげるが〔41〕、これがみなオーストリア起源のものであるのは偶然だろうか。わたしたちはそこに、世紀末の印象主義とは異なる、オーストリアの知的風土に根ざしたもうひとつの系譜を見ることができのではないか。そして、「別の状態」というユートピア幻想を最終的に破壊したムージルは、若き日の『マツハ学説判定への寄与』を通して後者の系譜に連なっているのではないか、とわたしには思えるのである。

この見方を補強するかのように、ルカーチ（一八八五—一九七二）もまた、一九六四年に書かれたある手紙のなかで、次のように述べる。

マツハからカルナップ、ヴィトゲンシュタインにいたるまで、オーストリアが新実証主義の産出国であつたのは、きつと偶然ではないでしょう。ムージル自身もまた十分に、新実証主義の洗礼をうけています。もちろんそれは——ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』に見いだされるのと同じような——ほんらい対極にあるはずの新実証主義と神秘主義の混合という、ある独特のニュアンスを帯びてのことではあります。精神のこのあり方が、ムージルをドイツの非合理主義から画然と隔てているのです。クラীগスをモデルとする人物をえがく際の、ムージルのあの鋭いイロニーを思いだしてください。〔42〕

このような考えにもとづくとき、「ローベルト・ムージルはオーストリアの作家か」という、先に呈示した問いにたいするプロツホの答えは、次のように書き改められねばならないだろう。ムージルは、作品の「テーマ」においてはオーストリア起源のものとの緊密な結びつきをどくにもたないが、その「精神性のある方、そのときすまされた鋭さ」がオーストリアに根を下ろしているがゆえに、オーストリアの作家なのである、と。

だがしかし、ムージルがマツハから受けとつたものは、その反ドグマ主義的な実証主義の精神だけではなかつた。本章の中心テーマである可能性感覚の誕生にも、じつは、マツハは大きくかかわっている。これまでに可能性感覚については、ムージルの作品では『特性のない男』と忘れられたSF小説構想だけを対象に論

じてきたが、可能性感覚の原型はすでに一九一〇年代に発表された作品のなかに見いだすことができ、その作品『愛の完成』（一九一〇）の成立にさいしては、『マツハ学説判定への寄与』を通して獲得されたマツハ的思考の影響が無視できないのである。そのことを確認するために、まずはじめに、難解といわれること多いムージルの作品のなかでもとくに難解なものとして知られる短編小説、『愛の完成』を見ていくことにしよう。

## 02 偶然の愛——ムージル『愛の完成』

一九一〇年、ベルリンの空の下でムージルは、執筆の最終段階にさしかかった『愛の完成』を書きついでいた。翌年には『合一』（一九一〇）という表題のもと、『静かなヴェローニカの誘惑』とともに一冊の短編集におさまることになるこの小説は、もとはといえば、「嫉妬」をテーマにモーパッサン風の「軽いシニカルな」<sup>4)</sup>作品を書くつもりで、一九〇八年に取りかかったものだった。それが結局、およそ二年半におよぶ悪戦苦闘をムージルに強いることになり、その間に作品のテーマもいつしか「嫉妬」から、新しい愛の可能性の探究へと変わっていた。

作品の主人公クラウディーネは、「かつて」偶然の男たちとの情事をくりかえしていた女である。「だが彼女は、自分のすることは結局なにひとつ自分の心によれないのだ、本当は自分と何のかかわりもないのだ、という意識をけつして失わなかった。どこにでもいる不実で不幸な女のおこないは、小川のようにさらさらと流れさり、ただひとつ、じつと思いに沈んで川のほとりに坐っているような気持ちだけを、彼女に残した

のだった」<sup>4</sup>。そんな彼女にも、やがて新しい愛の可能性が訪れる。「だがのちに彼女がいまの夫と知りあったとき、彼女のつらいおこないはすべて、あとかたもなく消えうせた。それからというもの、彼女は静寂と孤独のなかに閉じこもった。かつてのことははや問題ではなく、これから何が生じるか、ただそれだけが重要だった。そしてこれまでのことはすべて、ふたりがたがいをより強く感じるといふ、それだけのためにあつたことのように思われた」。

このような引用を連ねると、クラウディーネの愛の軌跡は、夫との出会いによって、ゆきずりの偶然の情事から必然の愛へと決定的な展開をとげたかのような印象をあたえてしまうかもしれない。クラウディーネにとつて、現在の夫は偶然の男たちのひとりではなく、つよい必然の意識になわれた夫との関係は、しかも「みごとにぴたりと合ったふたつの半身」というアンドロギュノスの神話を思わせる比喩をえて、あらかじめその出会いの必然を約束されてもいるのである。だがムージルは、必然の愛の成立をもとに現代の愛の神話を語るのではない。古来いふるされた運命的な愛の神話においては、躍動する永遠のイメージとして、あるいはまた悲劇的な死のイメージとして表白される必然の愛は、『愛の完成』では緊張をはらみつつも穏やかな日常の気圏に移され、夕暮れ時の室内で向かいあう夫婦の姿にうつしだされている。

ほとんど現実のものとは思われぬ、しかし微かにふるえる軸のようなものとして感じとれるこの稀薄な感覚に、部屋全体がささえられていた。さらにまた、この軸の担い手であるふたりによつても。あつたりの物たちは息をひそめ、壁にかかる光は金のレースとなつて凝固した。…あらゆるものが沈黙し、何かを待ちうけ、ふたりのために存在していた。…きらめきながらどこまでものびていく糸のように、世界をつらぬいて流れていく時間が、この部屋のまん中を通過するように見え、このふたりの身体の

中心を通過するように見えたが、だがふいにその流れを停止し、固くなるように見えた。完全に固くなり、静止して、かがやいているように。…すると物たちはいくらか身を寄せあつた。それはあの静止と、それにつづくひそやかな凝集だつた。とつぜん面が寄りそい、結晶が形成されるときのような……ふたりのまわりに結晶が生じた。その中心軸につらぬかれて、ふたりはふいに、幾千もの反射する結晶面を通して見つめあつた。まわりに寄りそう、息をひそめ身をたわめた物たちを通して。そしてもう一度、はじめてたがいの姿を認めたかのように、ふたりは見つめあつた……。〔45〕

この室内の情景はしかし、完成された愛の描写として小説の末尾に置かれていたのではなく、その冒頭を構成する場面のひとつなのである。小説『愛の完成』は、偶然の男たちとの過去から逃れ——それは後の回想シーンで語られる——必然の愛に結晶しているクラウディーネをこの後ひとり旅立たせ、旅先でふたたびゆきずりの偶然の男に身をゆだねさせる。そしてムージルは、通常ただ姦通と呼ばれるであろうその行為を、夫との究極の結びつきをもとめる女の「愛の完成」の試みとしてえがこうとするのである。こうしてクラウディーネの物語は、偶然から必然へ展開した愛がふたたび偶然へと反転していく、しかもその反転のなかにこそ新しい愛の可能性を見いだそうとする、常軌を逸した試みとなるのだが、それではなぜに、ひとたび得られた必然の愛はふたたび偶然へと反転していかねばならないのであろう。

クラウディーネと夫との関係が「みごとにびつたりと合つたふたつの半身」の比喩で語られることはすでに述べたが、結合したふたつの半身はいまや「ひとつの泡立つ球体」となり、外部世界からみずから閉ざしている。だがそのような「孤独な幸福」のさなかにあつて、ふとクラウディーネのうちで何かがゆらぐところがある。それはたとえば、どこか遠くから響いてくる音楽を耳にしたとき、あるいは冬至の頃、淡い光の

なかでもの言わぬ物たちが常とは異なる相貌を呈して立ちあらわれるのを目にするとき、そんな、日常の連関がゆるみ、感覚が遙かなものに向けて開かれていくとき、ふいに彼女は思うのだった。「自分はだれかほかの男のものになれるのかもしれない」――

そしてこのとき、夫を愛してはじめて、これは偶然なのだ、これはあるひとつの偶然によって現実となり、それからというもの、自分はこれをつかんで離さないでいるのだ、という思いが彼女をつらぬいた。<sup>46</sup>

ふいに、としかいいようのない形で日常の連関を無化する瞬間というものはたしかにある。そのような折りにわたしたちは、茫漠とした意識のなかでこの現実を内部から空洞化する虚構性にふれ、ある種のかなしみにも似た感情とともに世界を眺めやりもするのだが、クラウドディーネの場合、必然の愛という虚構のゆらぎは、自己の存在の亀裂をともないつつ、別の愛の可能性への予感となつて、彼女の意識の底に刻印されるのである。夫との結びつきが偶然のひとつにすぎないのであれば、「もつと別の遙かな生のあり方が自分のために定められているにちがいない」と。このような思いはむろん、「球体」の内部にあつて外部世界から守られているかぎり、現実感覚の回復とともにふたたび日常生活の安定のなかに埋もれてもいくだろう。しかし、痕跡は残る。

はたして、遠い町の寄宿舎にいる娘を訪ねてひとり旅立つクラウドディーネは、その車中、雪どけの風景を眺めながら「みずからの内に長く閉ざされていたものがひそかにはじき出されたかのような」感覚に襲われる。庇護された「球体」の外に出て浮遊しはじめた彼女の内部で、これまで「彼女の生を、自分を軸に旋回

するようにして高みでささえてきた確かさ」が崩れ、「この現実というものが無意味なものでしかないように」思われてくる。こうして現実感覚を喪失していく女のまえに凡庸な欲望をいだいたひとりの男があらわれるとき、新しい愛の可能性への試みがはじまるのである。

現実感覚とともに自我感をもしだいに喪失し、回想と予感のあいだを揺れうごくクラウディーネの内面を追うのはかならずしも容易ではないが、姦通にいたるその内的論理を摘出すれば、およそ次のようになるだろう。夫との関係が偶然にもとづいているのであれば、たとえ現実には比類ないものであれ、その愛はかつて無数にあつた可能性のなかから恣意的に切りとられたもの、つまりは「取りかえ可能な」事実のひとつと化す。一片の事実に絶対的価値を見いだせないクラウディーネは、自分が「愛する不安からだだひとりの人間にしがみついている」にすぎない、「身の毛もよだつ深淵となつて、自分のおこないのすべてを呑みこむ偶然性」を恐れているにすぎないと、思わざるをえない。彼女が望むのは、そのような偶然性をつきぬけて「出来事というもののない究極の内面性」(eine letzte, geschichtlose Innerlichkeit)において夫と結びつくことである。そのため彼女は、偶然の男に身をゆだねるのだという。

ここに見られるのは、日常のレヴェルで発せられもしよう問い——ゆきずりの男との情事はそれじたい偶然の回復ではないのか、といった素朴な疑問を寄せつけぬ論理である。出来事というものが時間と空間に規定された現実⇨偶然をまぬがれぬ以上、クラウディーネの夢想する「出来事というもののない究極の内面性」とは、現実が事実として刻みこまれる以前に存在したような可能性の領域、すべての可能性が偶然による現実化を拒んで可能性のまま並存する領域だと言えよう。そして、現実の限界を踏みこえる、非在の、とも呼ぶうるこのような領域に参入するためには、現実の論理をもつてしては不可解であるしかない、いやむしろ、現実の秩序そのものを欣然として峻拒する精神の論理がもとめられるのである。古井由吉は言う。

「偶然なものに身をゆだねることによって偶然性を超える。偶然性に身をゆだねて、この愛の結びつきを壊され、肉体の自我感覚もすべて引き裂かれ、何者でもなくなつたところで、初めて偶然とか現実とか、そういうものに依らぬ愛の結びつきがあるのではないか」〔47〕、と。

そのとおりであるにちがいない。このような論理をもつてしてはじめて、姦通は新しい愛の可能性への跳躍となりうる。ただし、そこに実現する「愛の結びつき」は、クラウドディーネの望んだ、夫との究極の合一と一義的に対応するものだろうか。

すべての試みが終わった後のクラウドディーネは、小説の末尾で次のようにえがかれている。

だがそのとき、彼女はいつか春の日に感じたことを想いおこしているような気がした。こうして、すべての人のために生きることもできる、でも、ただひとりの人のためにように生きることもできるのだと。そしてはるか遠くに、子どもらが神のことを、神さまって大きいんだよと言うように、

彼女は自分の愛のすがたを思いうかべた。〔48〕

神のようなものとなつた、女の愛は、「すべての人のためにように生きる」と「ひとりの人のためのように生きる」とことというふたつの可能性を、力点は後者にあるにしてもたがいに排除していない。「ひとりの人」つまり夫と排他的に結びつくのではなく、同時に「すべての人」と結びつきうるという広大な可能性の領野に達することによって、彼女は潜在する可能性の流れのなかから恣意的に切りとられた現実を超え、さらには現実を不可避的に規定する桎梏としての偶然性を超える。そしてこの超越とともに、偶然のもつ意味もまた変わらざるをえない。最後の行為に身をゆだねる直前、「ではやはり、きみはぼくを愛しているん

だね」と聞く男にむかつてクラウディーネは言う。

いいえ、わたしはあなたのそばにいたいということ、この事実、あなたのそばにいたいという偶然を愛しているのです。エスキモーたちのそばにだつて坐つていられるかもしれません。毛皮のズボンをはいて。垂れ下がった乳房をして。そしてそれをすばらしいと思うことだつて。<sup>[49]</sup>

現実の愛にひそむ偶然性に苦しみぬいた女が、最後には「偶然」を愛するという。いかにも奇妙にひびくこの言葉はしかし、エスキモーとなつて生きられるかもしれないという可能性の位相で発せられている。偶然がそのとりかえ可能という性質を介してみずからの内部に別の可能性の契機を懐胎していることを思えば、クラウディーネはここで現実につきささつた傷口としての偶然性——そのために彼女は、自分の肉体を引き裂いて血を流す——を、広大な可能性の側にむけて折りかえすのだと考えられるだろう。偶然を愛することはさまざまな可能性を愛することとなる、という論理にささえられて。

こうして可能性の領野にむけて解き放たれたクラウディーネは、その想念のなかで「ひとすじのごく稀薄な煙」となり、「ひとふしの調べ」となつて世界をただよう。「みずからの根を、絶対というものを破壊する、顔のない自我感のきわみ」となり、輪郭もなく、抵抗もなく、「けつして現実とならぬものの流れ」に溶けこむ彼女に、偶然にまつわる虚偽の意識はもはやない。夫との関係の偶然性に震撼し、必然の愛という虚構を破壊することにはじまつた彼女の愛の試みは、現実と自我の解体のはてに、偶然を愛する可能性の世界で完成するのである。

であれば、小説の表題にいう「愛の完成」とは、じつのところ、夫との究極の合一を一義的に意味するの

ではなく、偶然性の認識と同時に予感された「もつと別の遙かな生のあり方」を凝視しつづけるまなざし、その結果、絶対的な存在である夫すら相対化せずにはおかぬまなざしが透視する、別様でありえたかもしれぬ愛のかたちに向けて完成される愛、可能態として観念に宿った愛、の完成、を指ししめすものだと言わねばならない。

小説『愛の完成』は、その内的論理および詩的言語表現の難解さのゆえに、あるいは、孤絶した抒情の凝縮性のゆえにであろうか、読者の理解をこぼむ秘教的作品と見なされることが少なくない。しかし、一個の構築物としての作品をその基底でささえているのは、現実を虚構と見なす精神の視角、作中の言葉を借りるなら、幻視された可能性をまえにして「どこまでものびゆく頭脳の快楽」なのである。

ムージルは、いかにしてこの視角を獲得したのだろうか。

### 03 偶然の死——ホーフマンスタール『第六七二夜のメールヒェン』

ムージルの『愛の完成』が書かれる十数年前、ヴィーンの空の下でホーフマンスタールは『第六七二夜のメールヒェン』（一八九五）を書いていた。『千一夜物語』への連想を誘う表題をもちながら、夢と現実の交錯という、いかにも世紀末ヴィー的な色に染めあげられたこの小説においても、「偶然」が大きな役割を果たしているのを見ることができるといえる。

主人公の「若い商人の息子」<sup>30</sup>は、美貌・富・才知のすべてに恵まれながら、二十五歳にしてすでに社交生活に倦み、四人の召使いに庇護されて孤独の生活にひたっている。冒頭部でしめされるのは、美しい家

具調度にかこまれた室内空間でみずからの所有する美に陶醉する若者のすがたであるが、外部世界から閉ざされた（クラウディーネの）球体をおもわせるその美の世界は、ある日一通の匿名の手紙によって、自足したまどろみの夢を破られる。召使いのひとり弾劾する、しかしその目的もさだかでない手紙を受けとつた商人の息子は、甘美に完結した彼自身の生活が脅かされたかのように感じ、この案件を処理すべく町に向かうが、その町で彼は、偶然の連鎖によつて、しだいに逃れられぬ悪夢のごとき様相を呈していく迷路のなかへと引きこまれていくのである。

町に向かった商人の息子は、召使いにかけられた嫌疑をはらそうとベルシア王の使節の館を訪れるが、しかしそこで主の不在を告げられ、一夜の宿をもとめて町なかをさまようことになる。うらさびしい通りをあてもなく歩くうち、とある寶石店に引きよせられた彼は、勧められるままにさらに奥の間まで足を踏みいれ、そこで窓越しに目にした隣家の温室に興味をひかれる。どうしてもその温室を見たくなった商人の息子は、店主に案内されて中庭づたいに隣家の庭を訪れるが、そこには彼の家の十五歳になる少女の召使いにそっくりの子どもが待ちうけていて、彼を不意打ちするのだつた。なぜか自分に憎悪のまなざしを向ける子どもを追いかけて温室のなかに入った彼は、その小さな女の子ともみあつたあげく、最後には温室に閉じこめられてしまう。夕闇の迫るころ、ようやく温室を脱出した商人の息子は、だがふたたび袋小路に迷いこみ、そこから抜けだすために、空中に架けられた目もくらむような板の橋をわたらされ、わたりきつたあと、うすよごれた町を路地から路地へと追いたてられ、ついには、ふとさまよい出た兵舎の前で、一頭の醜い馬に蹴られて無残な死をとげるのである。

偶然の死、と言つていいだろう。何の理由もなく、ただ結果として差しだされる理不尽な死を、彼は死なねばならない。だが、死のままに、荒涼とした兵舎の一室に横たわる商人の息子は、自分をかくも無惨な死

に追いこんだ偶然の連鎖が、じつはたんなる偶然の集積ではなく、彼の四人の召使いの手に導かれたものであったと思いいたる。町へ向かわせたのは男の召使いであった。彼を弾劾する手紙が届かなければ、そもそも町へ出かけることもなかった。迷路の起点で、とある宝石店に誘いこまれたのは、店先で「ふいに」目にした緑柱石の飾りが老女の召使いを想起させたからであった。店のさらに奥の間にまで足をはこんだのは、「なにげなく」ながめた銀の手鏡に若い娘の召使いのイメージが映しだされ、「ふと」彼女の首に金の鎖をかけてやりたくなったためであった。奥の間の窓辺に「偶然」歩みより、隣家の温室に心ひかれたのも、少女の召使いが自分に生きうつしの子どもとなって招きよせたからにちがいない。その結果、自分は夢と現実の錯綜する迷路をさまよひ、今こうして粗末な寝台の上で死の苦痛にさらされている……。

かくして偶然は、悪意にみちた奸計となる。偶然の死は「審美家の運命」<sup>(1)</sup>となる。醜悪な現実を逃れて成り立つ、彼の純粹美の世界は、醜いままにとり残された現実の、偶然をよそおう断罪を浴びてもろくも崩れ、その崩壊のなかに美的生活のいつわりを認識する審美家は、みずからの醜悪な死を運命として受けいれねばならないのである。「悲痛な思いとともに、彼は自分の生涯をじつとふりかえり、かつて愛したすべてのものを否認した。予期せずして訪れた死を憎み、このような死へと彼を導いた生すらも憎んだ」<sup>(2)</sup>。

だが、はたして本当にそうだったのか。偶然は、やはりただの偶然ではなかっただろうか。四人の召使いの奸計は、死のまぎわ、みずからの死を「審美家の運命」として意味づけるための捏造だと考えられはしないだろうか。というのも、先にあげた個々の出来事は、匿名の手紙から生きうつしの子どもの出現にいたるまで、すくなくともその時点では偶然の出来事なのであり、主人公の意味づけによって運命へと必然化されないかぎり、あくまで偶然にとどまったであろうと思われるからである。小説『第六七二夜のメールヒエ

ン』はしかし、作品の意思として、商人の息子とともに偶然の必然化をもとめているように見える。そしてそれに符合するように、偶然の必然化をもとめる内的欲求が当時のホーフマンスタールに潜んでいたことをうかがわせる言葉が残されてもいるのである。

一八九一年の「手記」に、ホーフマンスタールは次のように記している。

わたしの頭をいま占めているのは「……」偶然のはたらき、テュケの問題だ。(……死んでいく女の戯曲。女は宿命的な結びつきがいかに悪意ある偶然によつて取りむすばれるものであるかを見ぬく。) わたしにはしかし、すでにこの時代の出口が彼方にほの見える。あの向こう側では、偶然は必然として、超個人的なものとして現われよう。「㉓」(傍点筆者)

「テュケ」(Tyche)とは、モイラとならぶ古代ギリシアの運命の女神であるが、R・W・ブレードニヒによれば、この運命の女神は、古代ギリシアにおける宗教の崩壊と変革の時期に出現した「非合理的な偶然や不当な運命の女神」<sup>㉓</sup>だという。「悪意ある偶然」との関連でテュケの名を語るホーフマンスタールは、もちろんそのことを知っていたにちがいない。それを知ったうえで、「非合理的な偶然や不当な運命」をもたらすこの女神の存在が気になってしかたがなかつたのであるう、テュケのことは、右の「手記」以外にも、一九九二年に書かれたゲオルゲ宛ての手紙の草稿中、「テュケが謎めいた力をおよぼすところで、意志が何の役に立ちましよう?」「㉔」という問いのなかで語られ、さらには、アミエルを論じたエッセイ「意志を病む男の日記」(二八九二)においても、「偶然に割りふられた人間の運命」<sup>㉕</sup>と等置される存在として引きあいに出される。こうした一連の記述から察せられるように、どうやら一八九〇年代初頭のホーフマンスタールは、

偶然を意志の力のおよばぬ運命として、しかも悪意ある謎めいたものとして捉えており、その必然化によって、とはつまり運命の認識によって、偶然から逃れようとしていたようなのだ。これは『第六七二夜のメルヒエン』に通じる考え方だといえようが、偶然についてのこのような考えは、世紀転換期ヴィーンの思想圏のなかに置かれることで、ホーフマンスタール個人の内部にとどまらぬ意味をおびてくるのである。すなわちそこにはひとりの特異な思想家がいて、独自の強力な実証主義的磁場を形成していた。エルンスト・マツハ（一八三八一—一九二六）である。

ホーフマンスタールのうちにマツハ哲学との類縁性をみるG・ヴンベルクは、次のように言う。マツハの見解によれば、「客観的かつ永続的な外的現実なるものは存在しない。むしろ現実とは、自我によって知覚される瞬間にだけ、客観的であるかのように構成されるのである」。この見解をマツハと共有するホーフマンスタールにとつて、偶然はきわめて重大な問題となる。なぜなら「外界を受容するさいに自我がよりどころとする感覚印象もまた、偶然的なものという性格をもつ、つまりそのつど違ったものとして現われてくるからである」〔註〕。ヴンベルクの論はマツハの要素一元論を前提としているため、この部分だけをとりあげて紹介しても、多少わかりにくい点があると思われる。それゆえ以下で、要素一元論の的をしぼってマツハの考えを素描しておきたい。

## 04 世紀転換期ヴィーンの磁場——マッハ『感覚の分析』

マッハの世界観は、『感覚の分析』(一八八六)の第一章をなす論考「反形而上学的序説」において、もっとも明瞭なかたちで示されている。マッハによれば、われわれが「わたしの机」とか「わたしの上着」とかの名で呼んでいる「物体」(Körper)、あるいは自分自身の「自我」(Ich)は、絶対的に恒常的なものではない。物体は破損したり一部交換されることがあるし、自我もまた時とともに変化する。だから、

わたしが今日自分の幼年期を想いおこすとき、もしも記憶の連鎖が存在しなかったとすれば、わたしはその少年を(いくつかわずかな点は別に)他人だと思ってしまうにちがいない<sup>58</sup>。

自我と物体、精神と物質という、二元論的世界観をささえるふたつの実体概念の存立をこのように日常のレヴェルで両面からゆさぶるマッハが、自我および物体をふくめて世界を構成するあらゆるものの「究極の構成成分」として認めるのが「要素」(Element)である。「要素」とは、色・音・熱・圧・空間・時間等の感覚的成分であり、「内のおよび外的世界の全体」は「あるときは比較的流動的に、あるときは比較的堅固に結びついた少数の同種の要素」<sup>59</sup>から成り立っているのである。したがって、世界に主観と客観の区別はない。マッハは、要素が結合して構成するものを「複合体」(Komplex)と呼ぶが、たとえば一本の緑の木を

眼前に見る場合（外的世界）と、想起もしくは表象する場合（内的世界）とのちがいは、ふたつの複合体の安定度が異なるというにすぎない。つまり、ともに「同種の要素」（色・音・空間・時間等）から成り立っているが、「その結合の仕方」が異なっているだけだと見なされるのである。

したがってまた、世界には「現実」(Wirklichkeit)と「仮象」(Schein)の区別もない。一本の鉛筆をななめに水中に入れた場合、通常「鉛筆は曲がって見えるが、現実にはまっすぐである」<sup>[6]</sup>といわれるが、いっぽうの実在性のみを主張する根拠はない。両者はともに「事実」(Tatsache)なのであり、このふたつの事実は「異なった条件の別種の要素連関」を表しているだけである。だから、当然、夢と現実の区別も消失する。

世界は現実が存在しているのか、それとも、われわれは世界をただ夢見ているにすぎないのかという、よく提出される問いもまた、まったくもって学問的な意味をもたない。きわめて混沌とした夢もまた、それ以外のあらゆる事実と同様、ひとつの事実である。<sup>[6]</sup>

こうして三元論的思考の枠組みをつぎつぎと切りくずし、二分された世界の恒常的安定という虚飾の仮面を剝奪していくマッハの世界は、諸要素の結合と関連、すなわちマッハのいう「函数的依存関係」(funktionale Abhängigkeit)の網の目におおわれた感覚の世界となる。

このように徹底して感性的経験につくマッハが、自然現象の因果論的説明を形而上学だとして斥けるとしても不思議ではあるまい。『感覚の分析』第五章でマッハは言う。物理学上の事実複合体は実験によって恣意的に単純化され、その連関が法則へと概念化される。その結果として「論理的必然性」(logische Notwendigkeit)が生まれるが、「そこにはしかし自然必然性」(Naturnotwendigkeit)が存在するわけではない。<sup>[6]</sup>

「原因」(Ursache || 原事象) という言葉がしめすように、因果論には一種の原始的な世界観が見られるのであるが、「自然における連関は、ある所定の場合にひとつの原因とひとつの結果をあげうるほど単純なことは稀である」<sup>163)</sup>。

かくしてマッハの世界観は、さまざまな自然現象の「終局の不変の原因」をもとめて「全物理現象の力学への還元」をアプリアリに要求する、十九世紀の「力学的自然観」にたいする根源的批判となる<sup>164)</sup>。ヘルムホルツ(一八二二—一八九四)やヴント(一八三一—一九二〇)に代表される十九世紀の物理学者にとつては、自然現象がすべて力学的に説明されるべきであるのは自明のことであり、しかもそれは、「偶然に、事実上、そうなのではなくて、論理的・必然的な根拠がある」(傍点筆者)からであった。それになんとしてマッハは、「一般的な因果律からアプリアリに力学の諸法則を導こうとする努力が無意味である」と説き、「力学の基本法則も経験的事実を集約したものであつて必然的な数学的真理ではないこと」を主張することによつて、「力学的自然観のドグマ」を打破したのである<sup>165)</sup>。

アインシュタインの相対性理論にマッハがヒューム(一七一一—一七七六)とともに影響をあたえていることは、すでに科学史の常識に属するであろうが、科学史家・広重徹によれば、マッハによるこの「力学的自然観のドグマ」からの解放こそは、相対性理論の成立にとつて、他の何にもまして「決定的な意味」をもつものだったという。マッハの実証主義的な考え方がエーテルの否定やニュートンの絶対空間・絶対時間の否定に寄与した、というだけではない。物理学にとつて力学が唯一にして絶対の確実な基礎であるというドグマからの解放なくして、「一般的・形式的な原理のレベルにおける力学と電磁理論の統一」という、アインシュタインの追求した課題が設定されることはなかつたからである。じじつ、エーテル問題をそれ自体として追求したローレンツ(一八五三—一九二八)とポアンカレ(一八五四—一九二二)は、それぞれ卓越した物理学

者であったにもかかわらず、その思考が深部において力学的自然観にとらわれていたために、ついに力学と電磁理論をおなじ平面上に立てることができなかった<sup>〔66〕</sup>。ニュートンの絶対空間・絶対時間の否定にしても、それはたしかにアインシュタインにとって示唆的でありえたであろうが、しかし、「これが示唆的でありうるのは、アインシュタインが新しい視座のもとに世界を見、そこに新しい問題を発見したうえでのことである」<sup>〔67〕</sup>。

広重のいうこの「新しい視座」を提供することによって、マッハは世紀転換期の物理学の世界に決定的な転回をもたらすことになるのだが、マッハから「新しい視座」を獲得し、その「新しい視座のもとに世界を見」たのは、物理学者アインシュタインだけではなかった。世紀転換期のヴィーンで、マッハの影響は物理学の領域にとどまらぬ広がりを見せていたのである。

『感覚の分析』第三章で「わたしは自然科学者なのであって哲学者ではない」<sup>〔68〕</sup>と言い、『認識と誤謬』(一九〇五)の序文でもまた、「何よりもまず、マッハ哲学なるものは存在しない」<sup>〔69〕</sup>と声明するにもかかわらず、世紀転換期のヴィーン大学にあって「帰納科学の歴史と理論」講座の教授をつとめたエルンスト・マッハの哲学的影響力は広汎にわたり、わけても「若いヴィーン」の詩人たちによる受容は、文学史におけるひとつの事件として記録されている。「若いヴィーン」の保護者兼スポークスマンの役割を演じたヘルマン・パール(一八六三—一九三四)は、その著『悲劇的なもの対話』(一九〇四)のなかで、マッハの『感覚の分析』を「われわれの世界感情、新しいジエネレイションの生の気分をこのうえなく表明する書物」であるとし、近い将来マッハの世界観は「印象主義の哲学」と呼ばれるであろうと予言したのである<sup>〔70〕</sup>。

自然科学者マッハの世界観が「印象主義の哲学」となる。もとよりそこには、文学者の受容したマッハ像が見られよう。印象主義絵画とマッハ哲学に通底する世界像としてパールが看取したのは、「すべてがとめ

どなく流れ、いたるところただ運動が、永遠の変容のみがあり、どこにも境界のない」[5]世界という、「自然主義の克服」を唱えるパールにいかにも好都合な反決定論的世界像である。それがしかし、マツハの科学的世界像からはなほだしく乖離したものでないのみならず、ホーフマンスタールに偶然の問題を尖鋭なかたちでつきつけるものであることを、科学哲学者・野家啓一の言葉はしめしている。

マツハ哲学における「世界」は、ラプラスやヘルムホルツが想定したような、透明で一義的に決定された予測可能な世界ではない。それは「感性的諸要素」が相互に函数的に連関し合いながら、絶えず離合集散を繰り返すアモルフでアンビギュアスな世界であり、そこには「真に無条件の恒常性などというものは存在しない」のである。それゆえ、かかる「世界」にあつては、因果論的な世界了解はそもそも最初から意味をなさない。[7]

主観と客観の二元論を破棄し、夢と現実の境界を無効にするマツハの世界は、おそらく、野家のいう「感性的諸要素」が「絶えず離合集散を繰り返す」、それゆえ予測不可能な世界として、詩人のまえに立ちあらわれたのであろう。この偶然の戯れにゆだねられた世界、因果論的了解をこぼむ混沌の世界をまえにして、ホーフマンスタールは、偶然に追いたてられ、夢と現実の錯綜する迷路をさまよひ歩く『第六七二夜のメルヒェン』の主人公のような気持ちをいだかなかつたであろうか。この「アモルフでアンビギュアスな世界」にあつて、すべては悪夢であり、同時にそれが現実である、と。

印象主義絵画は、そしてマツハ哲学は、「敬虔な人びと」から「心地よく堅固で安定した世界」を奪いさり、「変容の渦のめまい」のなかへと人びとを投げだす、とパールは言う[7]。世界の実相をそのようなも

のとして捉える画家たちは、みずからの眼に映るままの世界を描けばいいだろう。あるいは処女作品集に『見るままに』（一八九六）という表題を付し、みずから感覺器官となつて、感受した世界の点描を書きつづつたペーター・アルテンベルクのような詩人にとつても、マツハの世界は「印象主義の哲学」としてそのまま受けいられるだろう。しかし、偶然の流れにただよいながら、ふとこの世界に在ることの意味を問うとき、認識者の眼に映る世界は自己の生の根拠づけを許さぬ不気味な様相を呈して、彼、認識者を慄然とさせるにちがいない。ホーフマンスタールのえがく商人の息子にとつて、かくして偶然は悪意ある謎めいたものとなる。現実の町の路地は、悪夢の気配がちこめる迷路となる。死のまぎわ、四人の召使いの奸計を捏造し、みずからの死を「審美家の運命」として意味づけようとする彼の行為は、偶然を必然化することにより、ただそこに在るだけのグロテスクな偶然から逃れようとする、無意味な死の合理化の試みであるように思われる。

このような合理化を必要としたのは、ひとりホーフマンスタールだけではなかつた。『魂と形式』（一九一〇）ハンガリー語版、一九一〇ドイツ語版のなかでルカーチは、自我の確実性を喪失し、その結果世界の中心から放りだされて「万象と万象との関連」のなかに投げこまれた、世紀転換期ヴィーンに生きる人間たちの内面世界について、次のように言う。

まことにいつさいはわたしのなかで生起する、宇宙がわたしの内面に生起する、未知の活力がわたしの運命だ、しかし、わたしのつかのまの瞬間は、認識しえない運命とおなじように、わたしにとつて認識不能なものかもしれない、という感情。これは偶然の必然化である、偶然、刹那、一回性が、偶然、刹那であることをやめるほどの力によって、世界法則に高められるのである。これが印象主義の

形而上学である。〔74〕(傍点筆者)

これは、ベーア・ホーフマンのえがく審美主義者たち、「万象のなかに響きを立てている永遠の法則」と一体化し、死を「一つの使命」〔75〕と見なす審美家たちについて語ったエッセイの一節である。ホーフマン・スタール、パール、アルテンベルクらとともに、「若いヴィーン」のひとりに数えられるベーア・ホーフマンもまた、「勝手に偶然にすぎない感覚複合体」〔76〕からなるマツハの世界に戦慄し、ホーフマン・スタールとはちがうかたちではあれ、「偶然の必然化」をもとめなければならなかった。マツハの世界観を「印象主義の哲学」となしえなかった詩人たちは、パールの予言に抗して、こうして必然を保証する「印象主義の形而上学」へと逃れていくのである。必然とともにふたたび秩序を回復する、おそらくは新たな虚構のなかへ。

### 05—マツハと可能性感覚——ムージル『マツハ学説判定への寄与』

一九〇三年、シュトゥットガルト工科大学無給助手の職を辞したムージルは、ベルリン大学に向かう。書きはじめていた『生徒テルレスの惑い』(一九〇六)はまだ形をなさず、無名の一学生として哲学と心理学を学ぶために、であった。『マツハ学説判定への寄与』(一九〇八)はその成果を問うムージルの学位論文であるが、そこには「若いヴィーン」の詩人たちとは異なるマツハ受容のすがたを見ることができ。

だが『マッハ学説判定への寄与』に、後年の『特性のない男』の作家のプリリアントな知性の祖型を期待する者は、失望するにちがいない。というのも、この論文は、当時のいわば現代思想であったマッハ哲学をあつかいながら、学位論文という性質上やむをえぬこととはいえ、バールのようにその世界観を直截に論じるのではなく、「マッハが実際に自然科学の正しい、あるいは少なくとも矛盾のない把握から生じる論理的帰結としてその主張に達しているかどうか、確認すること」(Ⅱ)に自己の課題を限定しており、その結果も文字どおり、マッハ学説判定のための「たんなるひとつの寄与」にとどまっているからである。おそらくムージル研究者の興味しかひかないであろうこの論文の評価は「良」(laudabile) (78)、であった。『マッハ学説判定への寄与』にむかうわたしの関心もまた、個々の議論の内容よりもむしろ、その背後にあつて論をみちびく思考の視角を見ることがある。

さて、『マッハ学説判定への寄与』全体をつらぬく方法と性格は、序章の末尾で明確に示されている。「マッハの論述には、無数の卓抜な所見が見られるにもかかわらず、多くの矛盾もしくは少なくとも不明瞭な点があり、そのため決定的な意義をそこに認めるのは不可能である。これを内在的批判によつて証明すること」(79)がこの論文の目的である、と。「内在的批判」という方法をとる結果、『マッハ学説判定への寄与』はマッハからのおびただしい引用でうめつくされる。それはもちろん、マッハに内在する「多くの矛盾」を浮き彫りにするための手段であるが、にもかかわらず、引用はしばしば要約という形をとつて地の文と混じりあい、マッハの「無数の卓抜な所見」に寄せるムージルの共感を逆にかがわせるものとなつてしまふのである。一例をあげよう。

「因果概念の論駁、その函数概念による置換」と題された第四章では、自然科学の最終目標を自然に内在する究極原因の発見に見るヘルムホルツにたいして、それを論駁し、因果概念に代えて函数概念を提唱する

マッハの説がまず紹介される。「自然には原因も結果も存在しない。自然はただそこにあるのだ」(『力学史』)。「要素相互間の依存関係は、原因および結果といった不明確な概念によるよりも、函数概念によってはるかに完全かつ正確に表示しうる」(『認識と誤謬』)等々。これを受けてムージルは言う。「以上のマッハの言葉には異義申し立ての結論がしめされている。つまり、因果関係は不完全に分析されたものであり、完全に分析されたものが函数関係なのである」<sup>[80]</sup>。つづけて、因果論の基礎をなす、力とか物という実体概念を斥け、これをも函数概念で置きかえるマッハの引用の後ではこう言われる。函数概念とは、「したがって自然科学的に純化された実体概念である。」「……」自然には不変の物など存在しない。物とは抽象であり、比較的安定した複合体のシンボルである」<sup>[81]</sup>。

マッハの考えの肯定とも取れるこのような論述の傾向は、論文の末尾に置かれた奇妙な結語によって一層つよく印象づけられるだろう。自然必然性を否定するマッハの自己矛盾を指摘した第五章をふりかえり、ムージルは次の言葉で論文をしめくくるのである。「このことはむしろ、本稿で検討された形而上学のおよび認識論的に見た最終結果に関してのみ妥当するものである。一般に認められているように、マッハの個々の著作は輝くばかりの叙述とあふれんばかりの刺激にみちているのであるが、それについての考察はもはやわれわれの課題の枠には収まらない」<sup>[82]</sup>。このように、マッハへの基本的共感を感じさせながらも、『マッハ学説判定への寄与』はしかし、あくまでマッハ批判の論考として書かれている。ではムージルはどのようにしてそれを遂行するのか、次に批判部に目を転じてみよう。

ふたたび第四章を例にとり、マッハの因果概念批判にたいするムージルの反論を要約すると、ほぼ以下のようになると思われる。マッハによれば、もろもろの実体概念を用いずとも完結した科学的世界像が成立可能であるがゆえに、実体概念は不要のものとされる。だが、函数方程式で表示される要素相互間の結合もま

た自然界に実在する依存関係と対応しているのであるなら、現在のところ不完全に見える諸概念を函数方程式にもとづいて発展させることにより、実体概念も存続可能となろう。「これらの概念は容易に改変しうるものであつて、その発展はまだ完了していないことを、考慮しなければならぬのである」<sup>83</sup>。同様のことが因果概念についても言える。因果概念が事実を基盤にしている以上、それを排除するいわれはなく、残されているのは「因果性の完成の問題」である。しかし、因果関係を「たんに論理的な」依存関係と見なすマッハは、この点を顧慮することなく、世界を「諸現象の流れ」へと解体してしまう。かくしてふたつの見解が対立的に存在しうるが、「別のあり方の可能性が常に残されていること」(Die stets übrig gebliebenen Möglichkeiten des Andersseins)<sup>84</sup>を考えれば、マッハの見解のみを正しいとする説得的な証明は生まれてこないのである。

右に概観したムージルの反論には、ふたつの思考のかたちが特徴的にあらわれている。ひとつには、既成の概念を未完のものと見なし、改変可能とする視角。もうひとつには、完結しているかに見えるものをまえにして、それとは「別のあり方」も可能とする視角。両者は現にあるものを絶対化しないという一点で合流し、結局おなじ方向をしめすであろうが、この視角は、『マッハ学説判定への寄与』全体をつらぬく底流となつて、個々の反論をささえているのである。あるときはマッハ学説の認識論上の不備をつくつという形をとつて、あるときは自説以外の考えを斥ける排他的正当性の証明が欠けていることの批判となつて、確認のために、もうひとつだけ例をあげておこう。

力学的物理学およびその個々の物理概念を論駁するマッハをあつかつた第三章で、マッハの物理概念批判の根底にあるのが「それ自身感覺的に直接経験しえないものを経験から説明することはおよそ不可能である」<sup>85</sup>という考えであることを割りだしたムージルは、次のように反論する。現時点での困難や失敗は、

不可能を意味しない。たとえば音響学が感覚的に直接経験しうる音によらないで振動を解明したように、より豊富になった経験にもとづいて、いつかおなじ試みが目標に到達することはありうるものであり、これまでの試みが失敗に終わったがゆえに将来の試みもすべて無意味であるとするマッハの宣告は、科学的に見て正当なものではない、と。

ここでもムージルは既存の物理概念を未完のものに見なす立場を堅持し、将来別様でありうるあり方に目を向けることによつて、マッハの独断を斥けている。だが、そのことを確認するだけでなく、このようにたえず別様でもありうるものに注がれるムージルのまなざしそれ自体に目を凝らすとき、その背後にもうひとりの人間のまなざしが重なりあうようにして浮かびあがつてはこないだろうか。ニュートンにさかのぼる古典力学的世界像をほぼ完成させつあつた十九世紀の「力学的自然観」をまえにして、それとは別の、もつれあい変容する、要素の織物としての世界を見つめていたひとりの自然科学者のまなざし——彼の認識論上の矛盾をくりかえし批判しはするが、その自然科学者とムージルは、別様でありうるものに注がれるこのまなざしを共有しているように思われるのである。

たとえば、先ほど見たばかりの『マッハ学説判定への寄与』第三章で、反論に先だつて紹介されるマッハの物理概念批判のうち、エネルギー保存の法則にかんするものは、ムージル自身の手でこう要約されている。エネルギーを破壊されないものと見なす「この実体的解釈は、ものの見方の安定性をもとめる思考の要約に添うものでしかない。」「……」事実はいかにもこの解釈に順応するが、この解釈を必然的なものとして必要とするわけではない」<sup>86</sup>。法則に等値の事実というものは測定規準の合目的選択に依存しており、「もしもある量を別様に測定するなら」「……」この等値さえも存在せず、すべてのよりどころは失われるであろう」<sup>87</sup>（傍点筆者）。別様のあり方に注がれるまなざしのもので、「必然的」真理であるかに見える力学的物理学

の諸概念をかくのごとく解体していくマッハのラディカルな思考と比べて、先に見たムージルの反論は、いかにも堅実に既存の物理学を弁護しようとするものであるように思える。だが、反論にさいしてムージルが依拠する、現にあるものを絶対化せず別様でありうるものを見ようとするその視角は、いかに切れ味がよく見えようとも、またじじつ、その矛盾を異にしようとも、批判の対象であるマッハの視角と同角をなしているようなのだ。

そのマッハの視角が科学の全体像をとらえるとき、現状の科学は「偶然」の結果いま見るようなものとなったにすぎないという、おそらく当時としては驚くべき考えを生みだす。論文の第二章「認識心理学的および経済的考察様式」で、科学を進化論的な意味における適応のための経済的手段と見なすマッハのうちに、認識論上の懐疑論的立場を見いだすムージルの、マッハの科学観を次のように要約する。科学のいとなみが事実への生物学的適応のための一連の過程であるとすれば、熱の運動論をはじめとする諸理論にその見かけ上の正当性をあたえているのも、「歴史的偶然」(ein historischer Zufall) にすぎない。

比較的とるにたらぬと思われるひとつの歴史的状況でさえ、もしもそれがかつて存在しなかったならば、ある学問分野全体の発展過程はときに別の道を歩んだであろうし、まったく別の概念および概念体系に到達したであろう。「……」そう考えれば、いかに厳密な概念形成といえども「偶然かつ因襲的」(zufällig und konventionell)であるように思える。[88]

このマッハの科学観にたいして「わたしにはその正しさを疑う理由がない」と述べるムージルの、さらに彼自身の言葉で、マッハの指ししめす「偶然」としての科学像をえがきだしていく。

科学の形成物がその生成過程でさまざまな心理的・個人的影響および偶然に依存しているのであれば、そして事実によってあたえられた適応の要因ですら、偶然の情勢しだいである。「……」たがいにまったく異なる方向へと導かれうるのであれば、そのような適応の産物である科学は、当然、ただ現状の形をとりうるだけで、別様ではありえない、といったものではないだろう。「……」まさにあの、事実在即して「……」客観的必然性に基礎づけられた一義的な確かさが、ここで否定されるのである。「<sup>89</sup>」(傍点筆者)

力学的自然観の必然的真理を確信していた当時の物理学にとって、マッハのこのような科学観がいかに衝撃的であつたか、想像にかたくない。マッハのインシュタインへの影響については前節でも簡単にふれたが、現状の科学のありようを偶然の結果に帰すマッハの考えは、相対性理論の誕生にさいして、力学的自然観というドグマからの解放、ドグマ的学問体系とは異なる新たな理論の可能性を告知するものとして決定的な意味をもっていたことを、ここであらためて確認しておかねばならない。

偶然と可能性とが邂逅する地平、マッハが切りひらいたこの新たな地平に立って、偶然性の認識を必然性からの解放として受けとめたのは、しかしひとりの天才的物理学者だけではなかつただろう。処女作『生徒テルレスの惑い』(一九〇六)で成功をおさめ、すでに作家の眼で世界を見ることをはじめていたムージルにこの地平からの展望があたえられたとき、作家の視線にさらされた現実とは、偶然の結果へいま・ここにこういう形であるものとして、その唯一絶対の实在性を解体され、それと同時に、解体された現実の瓦礫の下から、これまで潜在する流れとして形とならぬまま埋もれていた可能性のひとつひとつが、あたかも「ひとつの調べ」のように立ちのぼってきはしなかつただろうか。「現実の外的世界の存在は「……」否定され

る、もしくは、とるにたらぬ仮定とみなされた」<sup>20</sup>——これはある研究者が、特殊相対性理論の形成に影響をあたえたと推測するマツハの実証主義的現実観であるが、この言葉は、「この現実というものが無意味なものでしかないように」思われるというクラウディーンネのつぶやきとこだまして、『愛の完成』にえがきだされた世界をマツハの相のもとに廻らせるのである。

ゆるぎないものと思われた現実の愛にひそむ偶然性を認識し、必然の愛という虚構を徹底して解体した果てに、広大な可能性の領野を見いだすクラウディーンネの愛の体験は、必然的真理と思われていた力学的自然観の根底に「歴史的偶然」を認め、その虚構性を論駁しつくすことによって要素の織りなす別様の世界像を見いだしたマツハの思想的営為と、その精神の運動のレヴェルにおいて、同形の軌跡をえがくものだと言えよう。ムージルが因果論的世界了解を拒むマツハ哲学の基底に探りあてたのは、おそらくこの現実を虚構と見なす精神の視角であり、であればこそ彼は、「偶然の必然化」をもとめたホーフマンスタールをはじめとする「若いヴィーン」の詩人たちとは異なり、偶然を愛する可能性の世界をえがきえたのだと、わたしには思われる。『マツハ学説判定への寄与』を通して獲得されたその精神の視角が、別様でありうる愛のかたちを追いもとめるクラウディーンネの内部に核として宿され、『愛の完成』というひとつの作品を結晶させたのである、と。

『生徒テルレスの惑い』（一九〇六）には、まだこのような精神の視角を見いだすことはできない。すでに一九〇二年、ムージルはオーストリアハンガリー二重帝国内メーレン（モラヴィア）の首都ブリュン（ブルノ）の地でマツハの『通俗科学講義』（二八九六）を手にし、それへの共感を日記にしているのだが、にもかかわらず『生徒テルレスの惑い』でえがかれているのは、現実と、現実からこぼれおちる非日常の世界とのあいだにはさまれて惑うひとりの少年のすがたなのであり、その少年テルレスの幻視する現実ならざ

る世界とは、狂気の渦巻く破滅的世界でしかなく、少年はいくどもその別の世界への接近を試みながら、そのたびにくりかえしみずからの孤独な夢想のなかへと逃げかえるのである。小説の末尾近くで語られる、「因果律の糸」に導かれた「死んだ思想」と、それとは異なる「生きた思想」②の対比のうちに、わずかにマッハ的なものの影が感じとれようとも、テルレスはあくまで傍観者として「生きた思想」について語るにすぎず、その意味では、偶然の支配する悪夢の世界のただなかをさまよう、ホーフマンスタールの商人の息子ほどにもマッハの世界を体現しているとは言えない。現実を虚構と見なす精神の視角は、『マッハ学説判定への寄与』を書くことによってはじめてムージルのものになったと考えるゆえんである。

『愛の完成』において文学の場にもちこまれたこの精神の視角は、以後もムージルのなかに生きつづけ、『特性のない男』にいたってひとつの名をあたえられる。「可能性感覚」——それは「存在することも可能であろうすべてのものを考え、存在するものを存在しないものよりも重要視しない能力」であり、「現実を恐れるのではなく、課題として、虚構として取りあつかうひとつの建築意志、意識的ユートピアニズム」であると定義されている。小説『特性のない男』は、この可能性感覚をもつ男ウルリヒに委託された「精神による世界の克服」③の試みであり、ムージルの作家的野心のほとんどすべてが注ぎこまれたひとつの文学的小宇宙空間である。そこにおいて「特性のない男」と呼ばれる主人公ウルリヒを規定する唯一の特性がこの可能性感覚にほかならず、それがウルリヒの思念を通して小宇宙空間全体を振動させる、いわば潜在的作動因の役割をはたしていることを思えば、可能性感覚の誕生を上げる『愛の完成』は、作家ムージルの誕生をも同時につげる、ムージル文学の原基的作品だと言えることができるのであろう。

以上、可能性感覚の誕生にマッハの存在がいかに大きな役割を果たしたかについて、あるていど筋道を立てて語りえたかと思う。だがいうまでもなく、マッハ哲学との格闘だけがムージルを可能性感覚へとみちび

いたわけではない。可能性感覚の誕生にさいしては、マツハ以外にも、これまで可能性感覚を生みだす知的水脈として語ってきた、ライプニッツをはじめとする多くの哲学者や思想家、作家たちの存在が重層的に関与していたはずである。本章で見えてきた世紀転換期のオーストリアに限ってみても、そしてもうひとり、可能性感覚の精神的系譜を考えるさいにはどうしても無視できない人物が残されている。マツハほど知られてはいないが、実生活の場では一時期マツハ以上にムーヅルと深い関わりをもったひとりの哲学者——次章では、マイノングという名をもつ、その「忘れられた」哲学者について語ってみたい。